



13
3416
100

十八編五巻之内

四十八

松野

勝善院

南總里見八犬傳第九輯卷之四十八

東都 曲亭主人編次

第七十九回

照文歸東一七房總福多一
東西和睦一七兩國津を用く

仁人仁を欲され仁にお至る仁外おわび仁必其人不在義外おわび義必其人不在求を
 求るの里見安房守義成主博愛仁如の心も水陸の施餓餓果一が、大法師を
 首ふて来會の大衆數百口次の日稻村の城へ召登され義成隨即對面あり齋を
 賜り布施を牽る其嘗待浅くむ各身の暇を賜りて感其寺小返され是よりと
 大江親兵衛も暇あつてと泊る瀧田の城ふる来る姥雪代四郎と共侶小義實老
 候小見参して君因の辱れを拜一ありるともめり當下義實主親兵衛が京師之
 あり一奇事且今番の戦功の事の顛末又代四郎が三河の奇子崎の賊難と京師

八犬傳九輯卷四十八

小の親兵衛の帮助の作りし夕暮を猶詳小整させて申しとる所小先小余を
 賜り果子を賜り且饌をも賜りて終日ふりていまだ飽なれ其次の日の目次のみ只這老少
 兩個をのこさせ長春の日の詞敵のふらひり然又直塚紀三と蚤崎の家みかへて
 来則主人の女房小京師のありし箇様々と報るの最照文又江親兵衛を迎
 執人為小二使を命せられ京師へ赴く水路の類の怪異ありしは往且古屋八郎
 景能の注進ふ其大槩を知られれ後の安危を知りも今小至て信りけ六
 いふと思ふの胸安らね紀三も俱小額を病めて慰め難つ過を日の春の
 つふ暮んとも花落と若葉做と倉山近く見る序小懐月いも遙る憂苦を
 ぐるかこるりけり有信一程小當春三月廿八日蚤崎十郎照文が恙もわ京師より
 歸帆の告ありか義成主の欽びて両家老辰相清澄并小犬塚信乃大江親兵衛
 大川社々大飼現八犬田小文吾政木大全杉倉直元等と召聚へ専他を俟るふ

程小六の目照文の筆吏大岸法六郎と俱小夥兵伴當夫役們を領せかり来ぬ
 其船洲崎の港口小果一今朝已牌の時候る是より路次をいなる約莫三時
 程小風く稻村の城小参りか義成則衆議廳みて對面わり法六郎も召せられ
 照文と俱不見参を両家老五士と侍坐して其言を听せらる當下大江親兵衛と君
 命あり我と出照文に向ひてのや蚤崎生近曾我歸東の美の後ふととて
 曩小遠灘小和殿の船小類怪の馮たけり故わり之既小聞召ぬ其美則
 箇様々と田税戸賀九郎と古屋八郎等が主僕十餘名新井の浦小漂着と高功あり
 事の趣の其大畧を解しと和殿の亦何等の故小京師小久く淹留する歸帆の邊
 かり其甚麼ぞと問へ照文然い逸時景能のの臣等も故わり之安知りぬ
 其美の後小京上人既小知召れ那類怪の厄解けし時臣等が船も西を投て走るを
 一日一夜津の海近くる程小勅風猛可吹起と檣を折り楫を推た船覆らんと

あつる者哉番といふことを知れ人我生る地多波と風と不儘りや漂ふと又日夜
風波中うや歌りと我船の神風の伊勢の阿曹の寓ふけり。その地の則伊勢の國司北
畠殿の封内にて陣願細曳平大夫周魚と喚ばる者の沙汰とて半死半生を我
主僕を浦の守屋の杖容とせしむ。醫師并小漁人等も課せし看病等用なく一個
一個の湯掖を薦めて勅り叮寧るのけしむ。我身夫役ふ至るまで死さるといふれども
船の金子と方物の最多くわを訝り之周魚情地と思ふや。他等も嚮ふ相告て安
房の里見の使臣るるといひへ必詭言ふて實々海賊多下とて敢て入の漏さると
緊しく牢舎の繫措せし来由は國司の訟けり。然る是等の穿鑿ふ去歲の果敢り
暮んととも有憊一程の扇谷山内の兩管領諸侯を連兵を合せ館を攻めたり。の
風聲那地へも傳ふか。臣等もいふ胸安くべし。身を免れ徑に還りて御先途ふ
逢ふと思ふのと計の所を知らず。只泊館の御印章を修善寺紙を金紙にて

網曳周魚の示しり。里見の使臣る照据ふ做せども北畠家とてこの書札の往來
るは故の周魚の其をるも信とせば放ち還さるもあらざり。其頃北畠殿東
關戰孰まて敗軍の艦海を渡りて這地ふ來りもあらん。欲て海邊の成りを
固くも。且間諜見を武藏と安房遣して兩敵の勝敗を備ふ知す。欲て今茲
正月下浣伴の間諜見毎々多氣の城の入り多る。兩管領敗軍のの趣いへ。さうと大阪
大村犬山比るを起し武藏へ渡りて五十子新井大塚忍岡の四箇城を輒く捕る
事の顛末。又行徳國府臺の關戰。我海曹司を首めて犬川大田大塚大飼の
武勇智計をりて敵將多く虜ふせられ。山内頭定主と扇谷朝良主業長房
敗北。其具も注進をり。事の便宜は是のころ。臣等去歲の初冬。京師へ
使を命ぜられ。船路を西へ赴たる。其秘事之間諜見が撈り知る據ありけん。
都北畠殿へ告稟をり。その後。知られけり。是より始り。臣等が一言の

偽詐るぬ故やうやふ悟られけん周魚の見せる御印章をよき認る者ありしか。
 いやく那里の疑ひ解けて北畠殿下知まらる。里見の原是南朝の忠臣ふて我先
 祖と同義烈の好あり。今ハ山海千里分据えぬ六疎洞胡越の似こども其
 家臣する者の渡海幸る破船て我封内阿漕の浦の寓りを受て疑ふて發獄
 久くもまふ留め措けを去敷るれ夙く異船のて其投方へ送り遣るべ死者こと
 わりかぎ網曳平大夫周魚奉りて臣等主僕を牢舎あり扶け出まつ勅りて國司の
 仰恁々と事的情由を解け示まつ則巨船一艘ふ所持の金銀方物まで箇も
 遺るく返り載り且舵工高師十餘名を假り如て船出を風は儘され深切怒
 同トかろぬ臣等が歎びのふらうもわび且肚裏の思をう我君天の資ふありて水
 陸の大敵咸敗績して房總を異の安えある今さら這里より船を返して安慶
 いまの要る所行なり然りとて大江を既ふかり参りて國府臺の闘戦の奇功あり

といふも亦勇氣の雨謀見の國司へ注進せしら安ぬ然らば京師へ赴くとも
 是も要る事事るべしといふせま。と分りもる。左に右さま尋思をえぬれば
 究竟の一差をぬかぬ折をもて京師ふより西管領の暴做も大兵をもて
 我君を伐滅さす欲ある。闘戦の顛末を室町殿に告奉り天朝の奏聞を経て
 調貢の金子と土宣を公武二庭に献らば我君忠恕孝順る。年來の御仁心あり
 時めよ願れと室町殿の朝廷の其私るに誠心を知る召る。後々も首尾
 ようくもと思ひゆて法六郎の恁々と意衷を示しつ國司の恩義を網曳周魚の
 謝し且別を告て我主僕數十名一人も恙あるも。那巨船ふらち乗て纜を解く
 是用の順風ふ西を投て走らせらる。恁而二月の初旬ふ至りて船浪は津果が
 隨即那津の旅宿を投めて阿漕の船を船工高師等も俱ふか下遣りて却
 我伴當の心利するを西三名情地の京師に遣りて事の便宜を揚らまふ

當春京師の管領政元主の故ありて罷られぬ畠山政長主一個管領よりと
 とも亦幸わす不似たり。因て大岸法六の機密を示し心給をて那御印章
 あり紙を用く室町殿へ進らせり。皇書一通と奏啓の上書をさし形の如く
 書寫させし調貢の黄金土宜を自録合せ配當て長櫃幾箇の蔵め
 去を夫役の早せ京師の上りて去歳の秋相識れる客舎を主伯とまつ次の日
 大岸法六と俱し朝服を敷へて伴當夫役を従へり。室町殿へ参上る不法郎を
 副使とて田税昔屋の兩人を那類怪の故をもて遠江灘みり相別れし御使ふ
 人足らぬ之態而臣等と法六郎等へ管領政長主の就く先館の御書を進らせり
 且稟せらく。寡君義成年未仁政を布施て民を折國を治めて敢隣國を
 犯せしころ。常の上を敬ひて調貢の礼懈ることあはれ介るぬ。因東の西管領定
 正頭定其政公るるを。叨み私怨をもて諸侯を連ね兵を合せて義成を伐

まくも。義成素より罪をて罪を連帥ぬ脱る路を。房總編小の士卒を
 由て三路の大敵を防戦より。只一日にて勝とを浴て水ぬ數千の戦艦を焼ゆめ
 陸ぬ數万の大敵を敷も走せり。是併蔽藩の八犬士。大阪犬塚犬村犬江犬山
 犬飼犬川犬田など。喚做を者の。智計武勇ありて。大敵既ぬ迹を埋め。水
 陸の路開けか。使臣延崎十郎照文。大岸法六郎澄妙等をもて。隨即微功を
 訴まつて。黄白方物を貢進を願ふ。夙く御制度ありて。西管領の暴を禁め
 あり。東國の大小名和平して。國民塗炭を免れる。獨義成の歎びのころ。ば
 公國の良賤男女。咸柳宮の御武徳を仰まつりて。家舞戸謡置酒して。太
 平を樂む。そのを以て。穩便る。御下知を願ければ。是則義成が呈書に
 載る所。陪臣照文等が意見をもて。稟をみわらむ。いふ。宜く御亮本具あま
 やういふれ。をか。秋訴して。則室町殿。足利へ。一千金。東山殿。義へ。一千金。管領

政長及當時の権家伊勢氏を首めて黄白の贈りあり。土宜方物も形の如く。數を盡して使札の礼とす。政長則其戈を空く。且つを。東國兵乱の多き上。亦既小聞食て敬篤に思召す所。房州を以て秋訴実。是其理あり。矧又貢進の礼屢めて忠誠を表せらる。今さら何等の疑ひあるん。其の戈を備ふ。又上て褒賤の上意。亦依らん。旅亭の退りて。却沙汰を等ね。と心て。照文等を返りけり。却照文。又逗留の間に。撰録。會廻勤。して朝廷へ貢を献り。措紳家。人情。先例ありて。漏れ。とる。小程。小室町殿。那訴を聞食て。管領。并小評定。衆を召聚へ。詮議あり。里見。義成。是謹慎の君子。小く。貢進の礼。兩三番。及べり。是ふありて。之を親れば。今秋。訴を所。情願。忠義。を知る。小足り。あられども。子路。る。ぬ者。の。片言をもて。孰り。や。訟を定む。死風。く。間謀。見を。武藏。と。安房。へ。遣して。那。西敵の善惡。邪正。を。撈ら。せ。あ。ふ。べ。く。も。や。と。い。ふ。衆議。一決。を。う。り。か。ば。義尚。則。政長。小

課。ま。る。り。あり。政長。是。を。兼。り。て。退。り。て。躬。く。間謀。見。を。東。へ。と。遣。り。る。佳。而。三。月。の。初。旬。不。至。り。て。那。間謀。見。等。か。り。ま。る。て。定。正。顯。定。兩。管。領。の。非。義。を。告。る。事。具。ふ。く。且。我。館。の。御。仁。心。并。小。八。大。士。諸。勇。士。の。才。幹。武。界。戰。功。大。義。の。一。伍。十。を。受。る。が。隨。ふ。稟。上。り。と。い。ふ。の。義。も。後。小。洩。せ。え。る。然。ば。室。町。殿。小。の。重。て。詮。議。を。遂。ら。れ。く。褒。賤。賞。罰。の。制。度。あり。けん。照。文。等。を。管。領。邸。へ。召。よ。せ。て。政。長。則。上。意。を。傳。へ。る。や。う。這。回。房。州。の。秋。訴。既。小。其。実。を。傳。へ。る。あ。を。も。て。御。使。を。東。國。へ。遣。さ。れ。く。定。正。顯。定。を。御。謹。責。あり。て。房。州。と。和。睦。仕。る。べ。し。旨。を。御。下。知。あ。る。一。汝。等。へ。御。使。の。御。道。を。仕。り。て。俱。小。東。へ。退。り。ね。と。て。御。教。書。を。遞。與。さ。れ。り。事。の。便。宜。是。の。こ。ろ。は。掛。向。の。最。も。畏。き。天。朝。小。も。我。館。の。御。忠。信。と。八。大。士。の。大。功。を。感。思。召。す。あり。て。勅。使。遣。さ。は。べ。と。ゆ。え。け。り。是。ふ。あり。て。秋。條。將。曹。廣。當。を。勅。使。代。小。做。さ。れ。て。室。町。殿。の。御。使。熊。谷。三。郎。左。衛。門。尉。直。親。と。共。侶。小。安。房。へ。參。向。さ。す。と。小。程。小。件。の。

西御使秋條廣當熊谷直親の伴當を多く領て三月十二日小啓行して岐路より先上毛小造らまくを。這時山内頭定ち上毛沼田の城小在り。又長尾景春へ同國白井の城小在り。又扇谷定正の武藏入間の河鯉小在城まとい其後え紛まるけし。那三將小上意を示して其罪を謹め以後を徹め。兼服和平小至極の目西御使も其家臣等を將く。水路を安房へうち渡して上意を傳ふべと定めらば是ふありて照文等の上毛より西御使小相別れて那敵城へ立まれば登時熊谷直親も照文小示してのまう。汝の風く安房へ退りてその義を房州へ傳ふ。又武藏相摸る。新井五十子忍岡の城小ありとて彼え。三士小も景示して退城の準備をなさむべとある。中途よりその指揮小儘せ。臣も法六郎と俱小伴當夫役を従へく。昨日五十子の城小あり件の首尾を大阪毛野等小告か。毛野等が款びしをうもわび。航て忍岡と新井の城へ使をもて道節大

角小傳達まといの他大塚石濱の城多。登桐三郎良平小森但二郎高宗と穂北も。落點餘之七有種小の別小使をもて必通達まといの毛野又照文小談ざら。室町殿の御威徳もて西官領兼服其那御使秋條熊谷必當格未着して水路を安房へ渡まらるべ。其折我亂智の西御使の案内小立。稲村の城小あり参りて。和殿の風く歸城してその義を館へ告まといね。その余の義。任々との後の進退を解示して酒飯を差めるとする程。日へ暮る順風なり。けし。柴浦小維せらる。船小臣等主僕を載て波の上安らら。小通宵走る風のま。洲崎へ歸着付小死と言。詳小告稟其。義成主を首小親兵衛自餘の四大士二家老憶も。皆も突れ。奇也。と稱賛も。井が中。小義成主。持小怡悦。小堪も。わりけ。照文を身邊近く找ませ。と宣ふ。料ら。ざりけ。汝の擇死。是第一の奇功。八士小伯仲まといのとも。過ら。とま。ぐら。む。現小禍福ハ糾小纏の

如約莫倚伏の至る所事塞翁が馬をうねる。初我照文の使を課せ重く
京師へ遣せ仁を迎へ執せん為に然るを仁の使を俟てあつらふかへり名を且
葛西の軍功あり又照文の風難の船を破られ漂泊して阿漕の去歳を暮し
その春更ふ京師の上りて我為ふ計りて大敵和平の時宜し造るは是我
素懐を果す所以其績拔萃る。勸賞の異日あらん是を當坐の褒美ふとて
急ふ傍を見かへり刀架の措れる刀ををづらふ合揚て卒と是を與へる照文の
阿とをかり藤行頻首受載きてよも過分は御賜鄙語云行心の功名をてをいふ
冥加の餘る畏さよと稟をつ些退たて却三家老と五大士小君恩を謝しける當
下大岸法六郎も御目前召出さる先由照文に従ふて副使をよめたる
とて褒賞の詞を賜りける甲乙面自身餘るを清澄さことを執合し且
りやう。去歳の冬照文を京師へ遣さる時呈書を齎せるほど吉凶料りかこ

けま那地小到りてものせよとて只素楮の御印章を做され渡しひい法六郎
附られの後の便宜小作りけるを神あるをと豫より知るよりあつたといへ
辰相然と心合く安くが如たも阿漕も那疑を解死するも御印章あり
と之又京師へ延崎が思ひの随ふ計りて御書を自由小寫せし御印
章ある故るまは其妙さうみひべからざと與言まは信乃も親兵衛も共侶
うち點頭く事皆人意の表みぬる。十一郎の揣る所術よく事の較正し
是我君の御成徳と伏姫神の冥助もあらん左も右も延崎生の全功
をいねれと執合をまは莊介現八小文吾も感て己を現小延崎の新智玉
必や大阪も一階を譲るべと稱く笑局小入かば照文の額小汗く。當り
か々と謝しける。當下義成へ又照文小課さるやう。汝の疲労もあるべけれど徑
瀧田へ罷歸りて京師首尾を老館小候と告る。さる款びるべけれど我亦

思ふ那御使の来者まへに猶數日の暇をらん法六郎も宿所を退りて後の勤ふ
 就食者之辰相清澄這意を添く宜く他事を勤るべと例の仁慈を示しあへ
 大家いよ感服してその日の席の果に有りて稻村の城内の京師の御使を
 管待の準備違るる早暮して十有餘日を歴ぬ程に有一日五十子の城あり犬
 阪毛野の快船の使ふ消息を齎して両家老五犬士等小報るなり這回参向の
 勅使代秋篠條生并小室所殿の御使熊谷生の両官領を御譴責の事果之
 近日渡海の變えあり西三首の過ぐら其御備をいそせ多く亂智案内を仕
 る急急如律令とありか義成是をうちやう両家老辰相清澄及信乃
 親兵衛壯介現小文吾等を召聚合て商議あり且課るや那御使が立ある
 とも五十子の敵城あり又在る所の浮室は皆是戰艦多し其汚穢る物を
 めて那人々を迎へ不敬よの故不親兵衛と照文を洲崎の浦る巨船五

六箇と士卒二百五十名をぬく那御使を迎へ又信乃壯介現小文吾の這
 回の響應使とを六郎兵庫助もその意を添へ旨を照文に傳ふべく又毛野が使
 ふの回翰を會らせその意を添へ事急緒ふもかかると振といをせあふ
 小を大家都てあろる果に次の日親兵衛と照文を準備の船を找めり士
 卒松竹早天あり柴浦を投といをせける是よりの後幾日もわらむ時四月
 十五日京師の御使秋篠條將曹廣當能谷二郎左衛門尉直親の儲の船小
 うち乗て洲崎の浦に來着て從ふ伴船五六艘大江親兵衛藤崎照文の
 別船も先小找と大阪毛野の後小從ふ這三士の從者も甚るる既に港口小
 造りとの有司地方の小吏人們出迎へ前駈して稻村の城の案内を儲の
 旅館に請待て響應使犬塚信乃大川壯介大飼現八犬田小文吾助後
 政木大全も西御使に拜謁して款待大實の礼を以て毛野親兵衛照文俱小



八代将軍

十一

女



八代将軍

女

就介磯崎増松の或の両主君の大刀を執り或の手燭を兼て扈從として
後方お侍り親兵衛と莊介の這席の奏者みて主に向ひて諸敗將の
姓名を通達せ義成是をうち叩て找て件の人々みち向ひて名對面の
礼正く且のやう諸君いよく恙まされ義成不慮の罪を両管領家へ
述べあり料らむも水陸の閉戦ハ犬士等防禦の備へ及て勝み衆さるる
る。竟み諸君子を屈請して當城お留め侍るは是豈義成が情願するんや
争何せん両管領の敗軍の後跡を埋めて和睦の議る其家臣等守る所の
城を棄て走りて其往方を知せむ諸君を迎合らまざる者一人も是あをせね
只今今日至れ然るを思ひかけもる京師より兩御使より一個の勅使秋條將曹
廣當一個の室町殿より遣され熊谷二郎左衛尉直親是今日も敵藩お光
臨せらるいまだ對面せされども安く和睦の一事ことわり義成苟も居らる

勅誡と台命を兼らるる武門の面目冥加の餘れる歎ひ何者う是は優まへんか
もて諸君子の意衷を告ま欲ま故推て見参入りぬひと口誼お羞る成
氏憲房以下の敗將應難々阿とをかりか言詳らざれば大石憲重原胤とお
もく席末より找て答もやう今ふとゆね御懇命我主僕十二名俱お
俘囚でありながら半々食ひ温み衣て朝夕の安かハ君が博愛の餘恩の仁者
不殺の真心を感佩の外いづと執合をまべ成氏憲房朝良朝寧自亂俱お
日屬の慈恩を謝して其寛仁を稱賛も義成是をうち叩て許我殿我大父
季其基の時より舊六々おわび又両管領の賢息達も倘憐る端み遇せら
いりふして蔽藩お駕を枉らるやあらんや就朝良朝寧主并お兼殿お請ま
せし一弔ありといひ々後方を見おくれ屏風の陰お扣る大阪毛野と政木
大全俱お礼服晴やふお席上より向ひて仰き見つ頻首せり登時

義成主也。先自胤小告るやう。千葉殿這壯伎を認めりあり。是を此
 藏藩の軍師大阪毛野金碗胤智是。其素生を原る小貴藩の忠臣
 と云え。栗飯原首遺服の子之餘事。他が口中小わらん。胤智找こ
 見参せむや。といひて毛野阿と応て恭しく自胤小ち向ひて告るやう。
 言新しくいへども。臣も久栗飯原首。原是千葉の親族。小君小仕さ
 私多。常小諫を呈りて。安危を未然小計るもの。佞臣馬加常武小説。訴
 せられて。刺龍山縁連小較れを常武猶も説言して。臣も嫡母克女兄
 之惨刻誅戮せられ。臣も母の妾。小那身小遺服あり。難を免れ
 辛くして相摸の國足柄の山脚。大阪村小潜居。臣も成長及び。父の枉死。冤
 家の上を言詳小説示して。幾程も身故り。是より後。一日の臣も復讐志
 移ら。假女子小身を假して。儼妓且用野と喚れ。竟小馬加常武酒宴の席小

招き。當晩宛家常武一家の主僕を。一垣を乘り。程小這時まで。宿
 世ある。義兄弟と知り。大甲文吾悌順。常武小禁錮。別室小在り。を（一）
 小と城を出。船小乗り。別して他郷小走。小又那宛家龍山。遠東大縁連。小後
 扇谷殿小仕。五十子の城小在り。去歲の正月。下流相摸。使を奉り。那地（二）
 登。小鈴の茂林邊。小埋伏。其首捕。親弟兄の怨を雪め。小就く
 傳聞の錯誤。小扇谷の西。小達。俱小聞。召ね。臣も後の復讐言ハ
 便是。神家の忠臣河鯉。権佐守如。汲引。由れり。守如。那縁連。奸佞。意。察
 まる。憎み。除き。欲。程小他。臣も宛家。を。知。其起行。を。報。小
 當。曾。大。山。道。節。復。讐。言。小。わ。ん。と。夢。小。是。を。知。臣。も。亦。其。折。道。節。小
 相知。事。小。合。期。て。扇。谷。殿。の。道。節。小。逐。れ。ひ。の。と。五。十。子。の。城。小
 大。塚。信。乃。小。技。れ。が。縁。連。の。黨。人。守。如。謀。叛。あり。諸。君。を。惑。せ。し。め。

憐れ下守如と鮮目前之身を措難く俱に刃を伏せひた。と世の風聲はせたり。
 臣等へ是過世ある八個の義兄弟を後悟りて共侶の近曾當家の仕へ
 より皆用ひらるる浅くも既の微功を成しとくとも臣等へ水軍の隊の長み
 君が御隊に向ざりしは是切の幸といふ感を解せしむく倭臣常武縁連が奸
 詐残忍の酷かりけりと首が忠誠鯁義の枉死の玉と石を分るる死後
 賞罰の御沙汰ある善政枯骨及といふ這美を訟まらん為の憶も多
 辯の作りいたと報る誠の感激の目皮の露み知られけり。當下大田小文吾の膝を
 我の額衝たる頭を拾げて自刎ふ。うち向ひく且の今う曩の法草野邊
 きて料らむ見参ふ入り。後ののを又稟解せんが折君ふ知られまらりて然の恩
 遇を承ふわねと逆臣馬加日記常武が拵て私宅に抑留め。情地は他が逆謀の
 幫助せま欲せを某緊しく説破りて其非を擧て審りて常武陽の

従へども是より言の洩れぬと怖きと馳て某を別室に囚籠て久くするま
 放ち遣らむ折る常武が賀席に筆を對面する。僞妓且岡野の假少を
 知らむ他が復讐の後をて送ふ奇れ過世ある義兄弟なるを悟れ。言
 盡すの違ふ。但其幫助の儘せり。他郷に走りけり。遊莫君が御内の常武餘黨
 多か。猶胤智と某を誣て云といひもあらん。今又見参の折を。胤智と
 共侶の舊冤を解ま欲す。這美を思ひ召さば。と言來ふ辨れ。自刎の聞
 事毎に取て身を措所を知らぬ。毅然とて答る。大坂といひ大田といひ。我の縁の
 あり。我を我思ひて用ることを知らぬ。及て今日を常武等が奸詐逆謀を悟る。ふ
 由り。刺這回兩管領の催促に従ふ。俱に敗軍の辱不遇けるを。後悔の外あり。を
 尚幸。和受成て城地を還る。我の往來を饒され。六教を承ま。願ふ
 のこと。謝するを。義成らも。千葉殿。恁思ひ。只胤智。悻順の。秋の。

我亦の亦のひありて本意の稱を最芽せし。就て又角谷の両公乎。請
 まや死一後あり。御家の忠臣河鯉守如。獨子とて中をる。河鯉佐太郎
 孝嗣も郷ふ姓名を政木大全と改め。今這席末に在り。他刑餘の人なれども
 其罪あつとせぬ。いそ御目を賜りねと引合され。孝嗣は我を朝良と朝
 寧ふち向ひ額を衝た。姑早と稟ま。身非を飾る。臣等商家ふ
 存り。目ハ口忠孝の二をもて任する。外わさう。小説者の為誣られ。竟死刑ふ
 かこられ。白刃頭を落し。折靈仙の冥助ありて不測必死を免かれ。且大江親
 兵衛の進退の欽びあり。それ後箇様多。如此の事いと親兵衛に従ふ素藤
 對治の首。這回又親兵衛の恩。美の為ふ葛飾の闘戦。義通君の先途を
 援。強敵長尾景春を防。尾を其崖界を陳て。是此果
 恩不報。身の薄命を見れば。栄利を求む。不意を救ふ。大士等の

薦めふより。里見殿知られ。ありて竟亦脱る路多。昨今仕て二隊の長の後。こそ
 いみれ然とも。今この時。いふと。西公達不見。参を饒され。稟をを悟らせ
 多。御歸城の後老館。正。不仰上ら。多。臣等が寛屈の罪解。只身の
 幸の。亡父の眞土黄泉。さ。さ。願を。請。亦
 親兵衛も我。朝良と朝寧。向ひ。鳥許。か。か。我。眞
 多。を。ひね。孝嗣。死刑の折。大。自。形。を。根。角。谷。中。二。を。稟
 多。言。那。死。を。救。ひ。白。狐。も。孝。嗣。の。母。小。受。る。恩。を。報。ん。為。の。所。行。る。よ。も
 後。小。備。知。れ。ら。う。の。項。某。の。故。り。武。藏。小。旅。宿。を。程。小。孫。知。る。孝。嗣
 寛。屈。の。死。刑。の。痛。ま。い。こ。い。こ。末。期。を。見。ま。く。や。く。忍。岡。邊。小。赴。た。他。が。必。死。を
 免。一。時。料。り。其。強。弱。勇。怯。を。試。て。友。垣。を。締。び。然。を。根。角。谷。中。二。の。淺。慮
 多。臆。断。も。孝。嗣。を。救。ひ。親。兵。衛。が。幻。術。の。致。所。と。せ。え。上。ま。い。く。君。様

惑ふ。人の噂は皆えり。夫幻術の魔法多し。仁人賢者の倣ふるも其の
 姫神傳授の神薬をもて人の必死を起す事多かり。昔朝寧主も死を避生り
 我神薬の奇功あれども。那倭人們も亦評え幻術なりといひり。其の倣ふるも悟
 らせぬ。孝嗣が忠と不忠の御疑ひ解けり。誑者の舌は劍に似たり。市小三虎を
 倣ふと死。曾子の母をも欺くべし。怖るべしといふ事。と憚る色も解醒せ。朝良朝
 寧もや悟りて俱小呆ると半响許姑且と朝良のいふ事。家兄といふ事。孝
 孝嗣の言誠不以あり。大江が議論いよく妙に。咄も饒されて歸城せ。必親報
 とり。朝寧も俱小いふ事。且累小孝嗣が罪過の事。親の讞断りければ我知る所
 る。ねども。當時上虚実を正もゆせ。殺さる。必後の世も不明の識を貽さん。靈
 狐の冥助も今賢君小仕るべし。則自他の幸之相心ゆといふ。心をまれば義成主。謝りて
 且笑え。いふ。之の義も亦易かり。却三浦殿親子の如た。八坂東一の勇士。小犬村

太用礼儀。僅小三百の小兵をもて古く。城を受合。主を當所。小徒者。成
 敗時運。小由れる。之。刑又助力を。理義を破らむ。其進退を敵小儘。多く士
 卒を害さ。是太勇の致も所識者。必感歎。且和殿親子。我當前の敵
 る。ね。疾小の送り。還も。い。其。小。我。這。意。を。知。あ。後。の
 好を修ん。今。一。要。時。の。程。多。と。慰。め。ら。れ。て。義。同。い。踞。然。と。し。啓。る。や。示。教。の
 赴。兼。り。ぬ。か。く。い。と。誇。る。み。わ。ね。と。我。カ。山。を。抜。く。べ。し。只。仁。と。義。小。敵。が。う。り。我。倘
 小。置。れ。む。和。君。并。小。犬。士。等。の。大。仁。大。義。を。具。小。知。ら。ん。や。孩。兒。が。為。小。後。學
 小。歎。く。と。い。な。れ。と。謝。れ。ば。義。武。頭。を。拍。け。て。同。常。の。迂。遠。を。り。と。思。ひ。仁
 義。の。微。妙。を。知。り。ぬ。譬。の。雲。と。水。の。如。所。れ。も。所。は。排。れ。ど。も。公。ら。ぬ。然。る。を。武。勇。以
 負。小。の。思。ふ。死。と。嘆。く。を。義。成。主。推。禁。め。て。御。父子。の。謙。遜。當。り。か。う。り。是
 よ。りの。後。文。を。結。ぶ。と。る。幸。多。ん。と。い。ひ。や。倣。を。見。か。り。て。稻。戸。史。徒。然。多。ん。

和老ハ壯小文吾と舊六丈あり。且這回行徳口の閉戦ハ他等が報因の由也。我ハ粗歩知りぬ。然れも猛く勇のわまり。深川ハ和老を起網。満呂復五郎もあふ在り。丹を梢地ハ船をり。朝良主と共侶ハ迎合り。ハ要わらふ陣没さ下と思へ。其作者ハあふ在り。といひ。毛野を指示。其由元ハ阿と。アハ心も果。左見右見。現ハ賢君の下。ハ八行の臣。其由元ハ不肖。我身一個の敗軍。當目死ざるを怨と。非如報恩の義を以首を接。とあり。今。何を面目。と越路ハ退り。いん。と言。蕭然ハ答。毛野のさと。慰め。其慷慨ハ理。かの折和殿の極。朝良主ハ腹殿の外。孫ハは。當那君陣没。和殿ハ必命を殞。其故ハ我ハ智先見あり。計り。當城ハ迎へ合り。ハ虜ハ做。是則壯介小文吾ハ代れる。二度の報恩の。といハ壯介小文吾ハ慰めて。俱ハ。稲屋和殿節を

折ハ自然ハ儘。身を敵城ハ置。といども忠義ハ厥。其賢良の故。我君格別の管待あり。是亦臣等ハ願。所徐ハ歸北の折。後的好を修め。と諭。由元。領。又。ハ。當下義成。憲房ハ。向。山内の公子。那驛馬三連車ハ奇妙。然れども奇功。ハ。奇物。是を破。とあり。和君の後。ハ。魯般ハ雲梯。墨翟ハ折。さ。思。ハ。憲房ハ。嗟嘆。開。拙。巧。ハ。盛實先生。拘。後。敗軍。ハ。身。亦。擒。せ。親。の。安。危。を。知。恁。而。在。一。日。由。秋。ハ。異。ハ。這。意。を。察。ハ。多。ハ。謝。ハ。義。成。感。歎。と。孝。若。人。未。馮。ハ。成。氏。側。より。然。也。と。點。頭。と。這。子。の。如。死。ハ。親。ハ。從。ハ。似。ハ。行。心。ハ。過。等。ハ。初。國。府。臺。ハ。信。乃。現。ハ。日。ハ。後。ハ。過。ち。改。さ。り。け。過。ち。成

争可いせん悔之及べぬる多る。只在村を恨しけれと陪話ると義成推林示めく。
君の貴人ふして且舊好あり。那御行るかりせ。駕を蔽藩へ枉られんや。夏古を
轉じて致ひと做し多るも遠か下と慰む。詞も果ね折る。土主麟之初更なるなり。
憲重是をうち受て胤久盛實等ふ目を注し。我も出づ。義成主。今宵の對面を
謝し。のりや。有かたきま。御懇命孰く感悦せざるべし。既初夜ふとゆ。華
昏の暇を賜るべくや。と執合をれ。為景の獨傲然とち笑。現敗軍の
將の兵を談ま。かむ。俘囚の人ふ。安樂を示ま。くも。我言るれ。をよの故
不礼あ。あ。む。む。退り。んと。誇るを成氏。睨へ。林。憲房朝良。自胤等。俱ふ
謝義の詞を連ね。主人の退坐を乞。か。義成。敢て。強。現。今宵の
初對面あり。長談燭を續べ。あ。む。復。見。参。ま。べ。ま。と。て。義通と
共侶。小。辨。別。と。退。た。る。辰。相。清。澄。以下。の。衆。臣。各。主。小。從。さ。ち。連。立。て

退散を登時預へ。も。多。く。出。て。來。て。成。氏。以下。の。十二。敗。將。小。請。て。臥。房。案。内
を。小。程。小。信。乃。現。へ。成。氏。を。送。り。枕。小。就。せ。毛。野。の。自。胤。を。送。り。政。木。大。全。の
朝。良。朝。寧。を。送。り。壯。介。小。文。吾。の。稻。戸。由。元。を。送。り。けり。各。所。縁。わ。れ。た。他。齋。藤
盛。實。の。憲。房。の。伴。小。立。女。為。景。憲。重。胤。久。親。兵。衛。と。預。人。小。送。り。れ。各。臥。房。小。入。り。けり。
第百九回中
長編も續をもて這回を燈で中下と題目上不見へる如
且四十六の巻端に追て附録目録に於ては着官此彼照し見下
却説義成親子の其夜分。成氏以下。十二個の敗將。小對面の次の日。京師の
西御使。小拜謁して。勅詔。并。小室町殿の。口。命。を。承。る。べ。と。て。よ。の。朝。勅。使。代
秋。條。將。曹。廣。當。と。誼。使。熊。谷。二。郎。左。衛。門。尉。直。親。を。稻。村。の。城。内。あ。る。
正。廳。へ。請。待。と。よ。の。故。小。犬。山。道。節。忠。與。と。犬。村。大。角。禮。儀。召。れ。昨。日
新。井。忍。岡。の。西。城。より。各。快。船。ふ。ち。乘。り。て。昨。宵。受。圍。て。稻。村。小。参。上。を。

伴當僅小三十名過む。又那西城の田税戸賀九郎逸時古屋八郎
 景能印東小六明相荒川太郎清英等。衆兵を招て是を守れり。
 介程の道節。去歳の冬の水戦。射く海底に隊を。扇谷朝寧の
 流れて下總葛飾。矢所河に造り。時犬飼現八に極れ。且親兵衛が神
 藥の即効。更生りつ矢傷愈て生拘見等と共侶。箱村の城在りと安
 知りて怒罵ると大方る。且の。館の慈善を旨と。御軍令ありとも。
 射て墜る敵の大將を救て活。置る。戦ざる。好々那奴が箱
 村在る程。非如哉。番召さるとも。我へ。敦園猛く發憤。と明
 相小諫められ。本城。尚憤り解けされ。其詰朝先信乃の
 件の怨をいひ。云々と論せ。信乃も徐に和解。大山開と云
 理。那扇谷の和殿の故主の冤家ありとも。去歳の春。那頭鎧を射て墜

志を果。去歳の冬。然が去歳の冬。閉戦の當館の御大事。我私
 志を行ふ。時。犬飼大江。這美をも。俱那死を救。の。敢敵愛
 する。朝寧が折命終ら。後。和睦ありとも。猶怨を送さるべし。
 然。後の患。の。美を忘れ。飲と解。道節言。早。悟。是。介也
 介也。と。心。又。辨。是。の。後。現。八。親。兵。衛。と。團。坐。る。日。の。多。れ。も。這
 美。を。毫。も。い。ひ。出。さ。ず。尚。同。人。の。む。時。の。開。を。亦。他。事。不。紛。う。て。説。誇。る。と。云。り
 去。の。信。乃。の。情。地。の。感。嘆。し。哥。々。理。非。不。醒。て。惑。へ。む。君。子。の。風。あ。つ。と。ど
 の。い。け。の。間。話。休。題。時。の。四。月。十。六。日。當。早。大。江。親。兵。衛。登。崎。照。文。と。光。絹。衣
 麻。社。村。々。京。家。の。旅。館。に。伺。候。し。て。時。分。宜。死。す。を。報。か。ば。勅。使。代。廣。當
 使。直。親。の。立。烏。帽子。大。紋。の。直。垂。み。く。小。刀。を。腰。に。跨。て。出。て。案。内。に。就。死
 去。の。隨。從。の。雜。掌。十。余。名。素。袍。烏。帽子。み。て。大。刀。を。執。り。征。前。を。執。る。由



大坂の陣 大坂 大坂

十

大坂の陣



稲村の城
 義成勅使
 誠使を迎ふ

大坂の陣 大坂

大坂の陣



あり各主小俱一とゆめり。恁而件の両御使の引れく備の席み込ぐ程の
國守安房守義成主も嫡子義通と兵宿朝服み身を教て三四間か
是を迎へ。正廳の上坐し請待を隨從の雜堂の廳の外宿み羅列ら當下
這席み與れる大阪毛野犬塚信乃。大山道節。大村大角。大川莊介。大銅
現八犬田小文吾の各礼服み大江親兵衛。蛸崎十一郎と俱亦是外宿み
這他次の間み東六郎。荒川兵庫助。杉倉武者助。政木大全。田税力助。燒
雪代四郎。滿呂復五郎。滿呂再太郎。安西就介。磯崎増松。朝夷三郎。白濱
十郎。七浦二郎。東峰三郎。三鱗船貝六郎。大岸法六郎。不彦。皆礼服の袖を
列ねて伺候せむとの者る。又義實老侯の名代み堀内藏人を侍りけり。餘
杉倉木曾介。浦安兵馬。小森衛門。致仕の老人を召れむ。又天津九三
四郎も是ふ同。各其宿所み在り。又堀内雜魚太郎。鎌倉み在陣を又小

森但二郎。浦安軍助。千代丸圖書助。木曾三介。小水門目音。音妙。真曳。單節。後
岡猿八範。内葉四郎。五子及大塚の城み在り。印東小六。荒川太郎。郎前み
見へり。又登桐山八郎。石濱の城み在り。落點餘之七。穂北み在り。又真向
井樞二郎。繼橋綿四郎。潤鷲手古内。振照弘教。三四的寄舎五郎。須々利團五郎
等。國府臺の城み在り。鳥山真人。岡山の壘み在り。石龜次團太。越卿三行
徳み在り。又指持。備杖。大樟村主。既み身の暇をありて。其本領み在り。又直塚
紀三。大江屋依助。有功の者るれども。他も堀崎の家僕。市河の兩人るれど。
おみ數ふべくもわぬ。向水五十三。天枝獨。結素。吉。是ふ同。看官。是を思ひね
か。却説。能谷直親の義成。ふらち向ひ。房州將軍家の御説あり。とりの義成
阿と心。膝を找め。拜聴。直親大紋の袖。掻合せ。抑舊。冬兵乱のみ。其
基本を原ぬ。扇谷定正。聊る。怨みあり。山内顯定。と近國。雷同の兵を連ねて

安房上總を伐す。其門戰破れり。東國も静る。此這多既小京師の事。上の御心安がらむ。肉を詮議を遂らる所定正頼定の非理分明。この故小我直親を御使の御心安がらむ。御心遣責なり。直親則上野沼田白井及河鯉の城の發向と上意。信へ其罪を責る。小定正頼定長尾為景に至る。各其非を後悔を。稟一解く。小詞多。罪過を因免ある。里見義成と和睦。東國太平の功を奏す。但定正頼定の兒子及合戰の諸將の敵小生拘られ。今猶稻村の城小在る。者主僕十二人多。義成速小和議を合れ。其敗將をも返す。西國是より好を結び。唇齒の思ひ。故を。この。這多小教き。天誅國罰。西なる。身小受て子孫断絶せん。言伴り。免昭据。小則連署。誓言。又血を。征前を折添て。ま。せ。り。人過ちて改る。小憚り。而管領。か。の。如。く。上。を。荷。擔。の。諸。將。孰。も。遠。ん。房。州。の。忠。義。孝。順。の。人。之。其。美。室。西。殿。也。知。カ。日。速。小。

御兼わて捕所の敵城を返まぐ。虜小を敗將をも速小放還。公私。幸甚。か。ん。這。多。と。誑。意。の。こ。る。び。最。の。畏。れ。天。朝。の。敵。慮。安。が。ら。む。所。わ。り。且。房州再貢。献の忠誠。と。其。家。臣。八。犬。と。唱。う。者。の。戰。功。を。獻。拜。わ。り。連。り。小。御。感。の。あ。ま。り。勅。使。代。秋。篠。主。を。添。ら。れ。り。と。異。の。御。兼。あ。る。と。説。れ。義。成。喜。悦。小。堪。ぞ。謹。答。る。中。御。誑。兼。り。い。ぬ。且。義。成。水。陸。三。路。の。大。敵。小。當。る。と。又。ど。も。只。防。ぐ。を。旨。と。し。殺。伐。を。好。む。と。小。諸。隊。の。壯。伎。八。犬。士。等。が。北。を。逐。ふ。敵。の。棄。す。城。の。据。り。る。是。也。或。は。又。殺。さ。生。拘。り。敵。將。も。多。く。只。其。暴。を。懲。さ。ん。為。の。と。久。く。留。む。べ。し。小。わ。ら。り。と。い。く。小。せん。大。敵。遠。く。跡。を。埋。め。和。を。講。ぶ。者。る。り。一。二。今。小。至。り。い。ぬ。然。る。と。天。威。御。武。德。の。過。分。恩。命。を。辱。く。も。何。を。う。遠。背。仕。ら。ん。速。小。那。城。を。返。下。敗。將。を。送。り。遣。ん。臣。等。情。願。小。い。ど。も。い。ま。ど。兩。管。領。より。和。睦。の。使。者。也。の。後。誰。何。と。請。回。小。外。願。小。

羅列れる。京家の雜掌西三個遠く膝を打ち恭しく義成のち向ひて。賢侯其美のち休れ臣等の京家の命に實の扇谷山内清我三將の老黨なる巨田新六郎助友齋藤左兵衛佐高實下河邊莊司行色と心へ又口我們的のちるび十葉の老黨原胤久の弟なる原赤石分胤輔長尾の老黨直江莊司三浦の兵頭水崎登人等の這里のゆり。寡君定正頭定將軍家の御諫責の畏と和睦の御業を仕るといども。賢侯の同意のち。否を知むるの故の京家の御使の請まりて。我們其伴當の打扮の俱と推参仕りぬ事機変ふ似て機変のわむいぬ海客を願ふ。と異口同様の陳謝を推参する素朴の三方托の定正頭定の折と和睦の誓ふ。白羽の征箭二條載るを助友高實會揚て。義成主の晋呈の當下河邊原直江水崎等四老黨の俱の義成のち向ひて。額を衝て拜謝し。和親の使者の

礼を盡其熊谷直親執令。房州疎畧をのち外見のち。兩官領諸將の口管和議をいとの故の我其使をゆて来れり。と陪話れり。義成異議も。其美のちいぬと心も傍を見たり。之の使者の答も。憶りけり。空の通交義成も亦飲ひ思へり。和睦の事、別議あり。餘事、後刻談む。俱の客の問、退れ。俟を便宜るべけれ。と聖の心、助友等、相飲びて言兼。却か犬士、向ひて名對面。且り。曩の、兩敵、虜殺時、或は黃昏、或は乱軍の中、と面を認めらるるべし。并か中、水崎、登人の如し。折犬村、主の戦、負て小磯真砂と共、侶、深廣、堀を身を免かれ。其後、河鯉の城、来り、在り。か、今番の使、立られ。口、這漢、を。小磯真砂、又許我の、近臣、望見、一郎品、革七郎、又稱、戸津衛の、從軍、する、妻有、優、萩野井三郎、かの折本所の、戰場を、免れ、れ、も、敢越、の、片貝、八、還、り、津衛の、安、を、知、ま、り、と、河鯉の、城、來、り、今、猶、淹、留、を、津衛の、迎、め、來、り、る、者、之、昨、も、兵

越の怨敵なり。今ハ眞弟の良隣。做らば仁義の餘徳をえん。教を願ふ。謝されば毛野も信乃親兵衛也。大角莊今現小文吾也。和議の成りを祝ふ。著せ。丹が中道節の聞さる如く黙然と。當下義成守鳴と。誰う在る。這六個の使人を各の間の案内をせよ。と喚ふ。阿と答る。田税逸を宮重時ハ次の間より身を起し。来て。助友以下の使臣ハ案内を以て退は。逆の眞の雜當の五六名を送りける。介程ハ秋篠條將曹廣當眞信と義成守の向ひ。房州升進の宣下なり。と告げ。義成守も果ぞ。義通と兵侶ハ席を避て拜聴。廣當威儀を繕ひ。宣下の趣別。美わむ。と。天皇詔とのま。里見安房守兼上總介源の朝臣ハ。礼を好む。富とも驕り。善政仁義ハ。あつる者。國治りて民親。賢佐多し。是を以て。貢獻の使者。其忠誠を致す。再度及べり。別又去歲の冬ハ。二路の大敵を。防さ。

一歩も攪み入る。と。一時ハ強敵を敵と退け。國民塗炭を免れ。是併其家臣。木上喚做者。智計武勇の羽翼。由れる其功。豈鮮少らんや。夫大功者。ハ必重賞を行ふ。賞罰正か。と。死。賢路。望れ。小人時を。民從。其の故。義成朝臣を。正四位上左少將と。安房守兼上總介故。如。嫡子太郎義通。を。従五位下。右衛門佐。と。其父義實朝臣ハ。隱遁。既久。と。又。どの。創業の武功。序。を。隣。見。鳳。孫。克。其。表。を。嗣。ぐ。不足。也。を。治部卿。又。其家臣。大江親兵衛。者。去。年。京師。ハ。使。せ。時。輒。虎。妖。を。對。治。し。良。賤。安。堵。の。思。ひ。を。做。せ。り。其。の。故。ハ。勅。使。代。秋。篠。條。廣。當。を。由。り。中。途。ハ。他。を。追。て。爵。位。の。宣。下。を。り。他。亦。稟。を。由。り。て。辭。ひ。し。票。まつ。り。故。ハ。今。度。改。て。並。其。八。大。士。を。從。六。位。の。下。叙。ま。し。且。大。江。親。兵。衛。仁。を。兵。衛。尉。ハ。大。改。毛。野。胤。智。を。下。野。介。ハ。大。塚。信。乃。成。孝。を。信。濃。介。ハ。

犬山道節忠與を帶刀先生小犬村大角禮儀を大學頭小犬川莊義信
長狹介小犬飼現八信道を兵衛権佐小犬田小文吾悻悻を豊後介
做る俱小忠戰大功の朝賞之這多義成朝臣兼ありて件八人小配當
まふと天白王が詔と宣へり是小由り之上卿及大使右少辨なり臨時の除目を
行れ勅使代臣廣當を遣小安房へ遣され朝恩を知らる。這神旨を
室町殿小仰合さる所小熊谷生の齋し。御教書もあるべし。備小告
詳小示と準備の廣蓋小冠烏帽子朝服を幾領を載るを數通の位記と
俱小逸與せ又熊谷直親も室町殿の御教書を合せて義成主小渡しけり。
這時義實老候の名代も堀内藏人貞行の両家老等と俱小次の間小在りし
召れ當席小入りて拜聴も然れ外願小侍り。大士等朝賞の過給ら驚
皆平伏言儘小と頭を抬るるけり。當下義成夫謹で勅答さる。臣義成

織芥の微功をもと入祖之家臣某等八人も俱小重爵の勅賞を兼る。今古小例
あるべくもいふ。且父義實の如し捨て采利小心る。老病那身小副るの故小名
代をもて拜走も是は小不敬小何を散位を辱ら仕るべし況大江親兵衛等
八人の受領も勿体なり。義成僅小房總二個國の守小く受領の家臣小
わふ非如勅賞ありとも。僭上小似て罪免るべし。物為時小必虧く亭午
日輪三五の明月孰も傾た虧るべし。義成其盈を願い盈も虧む。亭午
あるべしといふ辭表を献らむ欲も御執成を願けしと辭を廣當當
わも其謙遜然るる。王事監とる。論言の汗の如。出て返さるべし。
只兼ある小とわす。と諭其直親も俱小のや。昔鎌倉の右大臣朝
居るが大任を禀ありあり。其身小在國して受領志ゆる由割からむ。然を
いん戰國割据の今の世に上洛最容易くも。何ぞ居るが受まると僭

上との之をせんや。その後の室町殿の執奏す。定められる恩賞する。ふ开を強く
 辨ひ稟さ。違勅の罪を争何のせん。御兼勿論るべ。と解れて義成脱る路
 る。沈吟する頭を拾て八個の犬士を見かりて汝等も羨りつらん。我當茲を查
 志ね。といひれて犬士等阿とをかり。応て毛野の目を注されば毛野の夙く心泊く。
 則答稟す。我君御父子の御采爵の臣等が願ふ所。然ども思ひかけぬ。死
 臣等が受領の胸安く。縦此の階級ありとも。君臣とも不受領の名わづ是上を
 乱る。之這をわが。幾番も只御辨表を願ふの事。と以て親兵衛信乃道即
 大用莊介現八も。又小文吾も共侶の同意の事をいそま。義成急小推
 禁めて。あふ論議の不敬之先。兼まりて後ふ。と諭。つ又廣當直親の勅答異
 義のあり。か。廣當直親相欽ひて。いふひわりとを稱け。然る次の間。這回答
 ろも。や。両家老諸士の每憶も。欽びの聲を合せて。千歳を唱る者る。り。け。

勅答既小果。か。郷應使大江親兵衛。蛸崎照文等。兩御使小案内をん。
 別廳。不酒の札あり。犬塚信濃。大阪下野。犬村大学。犬川長狹。莊介。大田豊後
 犬山。帶刀。犬飼。現八。兵衛等。兩御使。小拜見。受領の欽びを稟。い。め。
 是より後。も謙遜。守介。尉頭。各首。敢唱。就中。忠與。義任。
 後々。ま。も。猶。只。道。即。莊。介。との。喚。せ。官。名。を。稱。さ。る。一。况。六。位。
 する。の。秘。し。人。小。知。せ。ね。世。の。い。せ。え。さ。る。い。け。り。ま。是。後。の。話。之。候。而。兩。家。老。
 諸。兵。頭。も。兩。御。使。小。拜。謁。配。饌。の。款。待。法。か。ら。む。給。侍。の。青。士。六。り。替。り。海。
 美味。を。盡。せ。る。成。皿。饌。い。い。べ。く。も。わ。び。最。後。小。義。通。父。小。代。り。廣。當。直。親。小。
 酒。不。要。を。薦。めて。大。刀。馬。代。谷。白。銀。二。百。枚。を。牽。れ。り。然。る。京。家。の。雜。當。伴。當。奴。隸。小。
 至。所。ま。で。咸。珍。饌。小。飽。さ。る。且。折。乾。さ。賜。り。て。い。ふ。醉。を。盡。け。既。ふ。七。日。頃。迄。
 又。當。席。も。果。か。兩。御。使。廣。當。直。親。の。辭。て。照。文。等。小。送。ら。れ。て。俱。小。旅。館。へ。

退りけり。その日巨田助友齋、藤高實、下河邊行包、原胤輔、直江水崎等、客の
 間、郷食饌の儲あり。大阪下野犬塚、信濃犬村、大学、犬川長狹等、送代、
 此を来り。酒盃を薦むれども、助友等、辭ひて多く喫まざ。只城逸與の目を定め
 られて退り、準備せまかりといひけり。既、酒盃納り、又犬塚、大阪、若宿、出で
 來て、件六個の使人、小君命を傳る。和談既成る上、那五ノ城を返す。敗
 將連を送り遣らる。今さう仔細。那君連、面談して、時日を定むべしと
 あり。かゝり、助友、高實行包等、相欵びて高量。今より六日の後、本月二十
 一日、吉日との日あるべし。這を以答。かゝり、天士、則義成、主、望え上と
 件六個の使人を引、成氏以下の諸敗將、對面を饒まける。這段、尚長やう
 へ、丞、不盡まぐも、あざざれば、又卷を更めて、且本回の句末、解分るを聴ねが。

南總里見八犬傳第九輯卷之四十八終

